ビワマスの標識放流魚調査（2+ までの中間報告）

田中　秀具

◆背景・目的

ビワマスは増殖対策として毎年、2gサイズ、70万尾を目標に種苗放流が実施されている。より効果的な種苗放流方法の検討を目的に、2005年に大きさの異なる2種類の種苗に標識して放流した（下表1参照）。2009年まで再捕魚の確認を行う予定である。ここでは、その中間の概要を報告する。

◆成果の内容・特徴

- 標識魚は2006年1月から確認でき、2007年12月現在、84尾が確認されており、その83.3%を大型種苗が占めた（表2）。
- 現時点では大型種苗の方が放流効果が高いように思われるが、標識魚の主漁獲期の終期となる次々年までの再捕状況をみて判断すべきものと考えている。
- 標識再捕魚の成長の様子を図3に示す。なお、標識再捕魚の体長は標識間で差はみられなかった。

◆成果の活用・留意点

- 2009年まで調査を継続する必要がある。
- ビワマスの捕獲に関して、近年、漁業者の漁獲以外に、遊漁者のトローリングによる採捕が出現している。

表1. 標識放流概要

	誕生年月	放流体重(g)	標識(切除部位)	放流尾数	放流場所	放流時期
小型種苗	2004年12月	2.70	脂鰭	20,000	知内川	2005年3月
大型種苗	2004年12月	11.40	脂鰭＋腹鰭	19,056	琵琶湖	2005年6月

表2. 標識魚の再捕状況(2007年末)

	2006年(1+)	2007年(2+)		合計(率)
期　間	1～11月	6～9月(漁期)	10～11月(産卵期)	
大型種苗	12	51	7	70(83.3%)
小型種苗	2	10	2	14(16.7%)

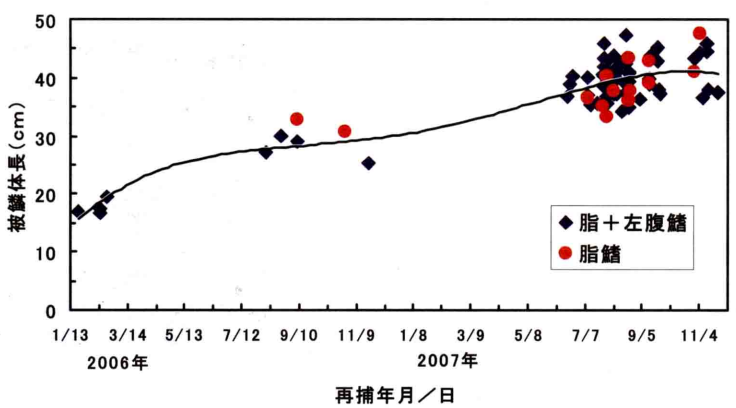

図1. 標識再捕魚の成長